

乳腺科

● スタッフ（2021年10月1日現在）

診療科長 石川 孝
 医局長 河手 敬彦
 病棟責任医師 浅岡 真理子
 外来医長 宮原 かな

医師数 常勤 13名
 非常勤 3名

● 診療科の特徴・特殊性

1. 特徴

外科的治療では、多職種が参加する術前・術後カンファレンスを毎週開催し、治療方針のコンセンサスを構築している（乳腺科医、病理医、放射線科医、形成外科医、検査技師などの参加）。また当院形成外科と協力体制を整え、根治性と整容性を重視した oncoplastic surgery の提供も拡充させている。

薬物治療ではエビデンスに基づいた各種治療を提供できる環境であり、全国規模の臨床試験や治験への参加、BRCA1/2 遺伝子検査、遺伝子パネル検査（NCC オンコパネルシステム、FoundationONE CDx）の実施が可能である。遺伝子検査については遺伝子診療センターと連携を取り、遺伝カウンセリングを実施する環境が整っている。

乳腺科はチーム医療のモデルケースであり、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー（MSW）など多職種との連携を密に持ち、患者のために必要な医療環境を提供している。

【手術】

- ①センチネルリンパ節生検の積極的導入・不要な腋窩リンパ節郭清の回避。
- ②根治性と整容性を重視した術式の提供。乳房部分切除術／乳房全切除術／乳房再建手術。
- ③乳房再建術：乳房全切除例に対しては、形成外科学講座に常勤する乳房再建専門医が窓口となり、再建にまつわる情報提供ができる環境で、乳房再建（人工物または自家組織）を提供する体制が整っている。再建に関しては高度な専門性が問われ、科を超えた診療となるため、毎月合同カンファレンスを開催し、予定している乳房再建症例の検討・情報共有を行い、最良の治

療が提供できるよう努めている。

- ④遺伝性乳癌卵巣癌（HBOC）に対する予防的乳房切除の提供は、鋭意環境調整中である。

【化学療法】

ひとりひとりの乳癌のサブタイプに合わせた個別化治療を実践している。

- ①術前化学療法：トリプルネガティブ乳癌や HER2 陽性乳癌に対し積極的に導入。またトリプルネガティブ乳癌やホルモン陽性乳癌には、dose-dense chemotherapy も導入するなど、新しいエッセンスを取り入れている。
- ②術後補助療法：化学療法、内分泌治療、放射線治療など、ガイドラインを基にした標準的治療を中心に提供している。術後放射線治療では放射線科に尽力いただき、短期照射（寡分割照射）の提供が可能である。
- ③再発治療：患者主体の治療方針の構築と、advance care planning（ACP）を軸とした、QOL の改善に努める。

【緩和ケア】

当科には緩和ケアチーム兼任医師が常勤し、各部署との連絡がスムーズであり、患者・ご家族に寄り添う環境を提供している。また、緩和医療部やMSWとの連携を密にとり、Best supportive care を提供する体制が整っている。

【治験・臨床試験】

世界各国を対象とした治験や全国規模の臨床試験に積極的に参加している。現在進行中の治験・臨床試験については、乳腺科ホームページからも閲覧できる環境を整えている。

2. 特殊性

男性乳癌は全体でわずか0.5%程度であり、ほとんどが女性を対象とした診療科である。2018年の新規乳癌患者数は約9万5,000人と推定されており、日本人女性の乳癌罹患数第1位で推移している。一生涯では9人に1人が乳癌に罹患する統計であり、今後さらに乳癌検診の拡充が進むことで患者数の増加が容易に見込める。

年齢層は40-60歳代に多く、職業や子育てなど社会的中心を担う年代の女性が対象となる。また2019年の最新統計では、乳がんの10年生存率は約80%と良好であることが報告された一方で、術後にはほとんどの患者で再発を予防するために継続治療が必要となることから、がん治療のみならず心のサポートや経済的なサポートなど、幅広く十分な専門知識が要求される。

● アピールポイント

チーム医療のモデルケースを提供
 根治性と整容性を重視した乳癌手術の提供
 乳癌認定看護師による個別のサポート（看護外来の確立）

手術件数変遷

